

時報

No. 1

1950. 1

綾南東飾雨

宿合澤劔

スレストツバノ岳北

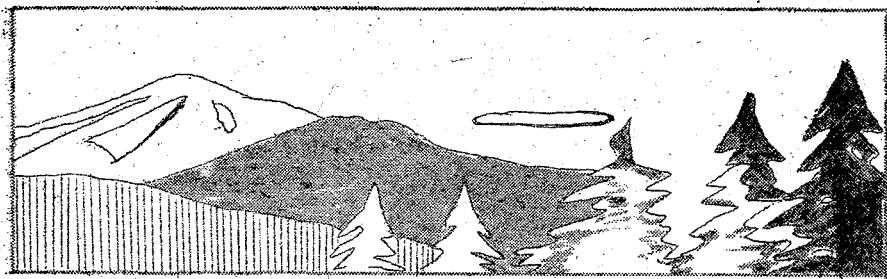
綾主馬白の期冬嚴

記

録



大阪大學山岳會



大阪大學山岳會報告 (一九五〇・一月)

卷頭言……………會長 篠田軍治 2

雨飾東南稜……………一九四九・四月……………大島輝夫 5

劔澤合宿……………八月……………家田千尋 7

北岳バットレス……………十一月……………加藤幹太 11

嚴冬期の白馬主稜……………一九五〇・一月……………徳永篤司 18

會の活動記録……………一九四九・四月—一九五〇・一月……………27

冬山行動表……………35

編輯後記……………37

時報第一号に寄せて

会長 篠條 田 軍平 治

過去の阪大は幾多の優秀な部員を出してはいるが、全体としての纏まつた行動にはあまり大きな足跡を残していない。併しこれは阪大の山岳部員が山岳界に何等の貢献をしていないといふことを意味しない。或は学連の事業に或は出身校の後輩の育成に隠れた業績は多々ある。唯学内に於て新人を養成したり、学校単位での大きな行動のようなものだけが活動の対象であると、部の存在意義を狭い意味にとるならば活動は明かに不活潑なものであつたと言えよう。

併し新制大学が充足してみると従来のような行き方は許されなくなつた。初年度の入学者は新制高校の卒業生と旧制高校第一学年の修了者である。今までのような旧制高校三ヶ年を終えた者だけの集りとは違つたものになつただけに、その行き方も当然違つたものでなければなら

らない。旧制高校でやつていたようなことも勿論必要になつて来て、今までのような外国の大学クラブ式の行き方を纏まりかえつてゐるわけにはゆかない。他面、今まで理科系学部では漸く纏まりが出来てこれからという時には卒業研究や何かで色々な行動上の障害にぶつかり、高校では直結する学部がないだけに漸く動けるようになつた時分にはもう卒業して分散してしまふといふ悩みがあつたが、これは大体に於て解消したものと見えよう。こゝまで述べて来て、阪大には北校（浪高）南校（大校）が教養部及び法経学部、文学部（浪高内）の二学部として生れ出したことを附加すれば阪大山岳会という全体的な組織が出来上るべきであり又如何なる性格のものであるか別に取り立てて説明しなくては、O・Bの諸氏にも理解してもらへること、思う。併しこの機会に戦争末期から今までの経過を記述しておくことも無意味なことではないであらう。

戦争の末期、学風会が報國団式なものに改組され各学部会が無くなつて山岳部も鍛錬本部内の行軍山岳部の形で一本のものになつたが、勿論本来の行動はするに由なく僅かに年一回の強歩大会を主催したり、燈火管制下でさゝやかな山の集いを時々催して山やろキーを語り合う程度のことしか出来なかつた。戦災や疎開の慌しさの中に失われた資材も少くはなかつた。當時自分はポツダム宣言の内容を疎開先で死んだ義父を弔つた時、地方新聞を知つて霧の中に始めて尾根が見えたような気持を味わうことが出来た。併し、それは長い長い尾根であるように思われた。それでも終戦という悲しい現実の中に遠く困難なものには違いないが、ルートがはつきりと見えて来たことは何物にも換え難い喜びであつた。それは、寒さは段々と酷しなつては来たが夜明けまでには、あと何時間、もう大丈夫というあの氣持であつた。併し部の再建は中々抄らなかつた。阪大には学徒出陣が無かつ

ただけに旧部員の復員を期待するわけにはゆかない。兎に角、出来ることからやつてゆかなければならぬので二十一年の秋から細野のスキー合宿を計画して、その冬に曲りなりにも実行に移すことが出来て、第一回の神鍋の大会で優勝し、最終回戦技スキー大会という名で行われた時にも有終の美をなすことの出来た伝統あるスキーを復活することの出来たのは、友田君はじめ熱心な部員の献身的な働きによるものである。

こうしてスキーの方は再建の第一歩を踏み出すことが出来たが、山の方はスキーのように纏まつた行動をしなくても曲りなりにも山行が出来ただけに軌道に乗るには案外手間取つた。工学部で戦後最初の夏山報告会を催せたのは二十三年であつたが、まだ、内容筋には乏しいものであつた。従来とて、又とない名コンビを形成すべき善の人間が卒業まで全く知らずに過してしまつた例は多い。こうした苦い経験が又

も繰返されそうな状態にあつた矢先、徳永、大島両君の春山での初顔合せが全く偶然なことで行われた。出身校も学部も学年も違つていたのを全く顔見知りでなかつた者同志が同じ阪大であるという綱で固く結ばれた時、こゝに部の再建というよりは建設の第一歩がはつきりと踏み出されたのであつた。

だから会の実質は発会式以前に出来ていて、実際の活動も二十四年春の雨飾行を最初と見るべきである。そして間もなく思い掛けなく予期以上の新入部員を得て、会の外観も整えることが出来たのである。報告に現われているように今までの経過は順調にすく／＼と伸びて来たと思ふ。併しそれだけに来るべき今後の試練に對して十分な覚悟が必要である。今後出来るだけ記録を纏めて、反省検討に資したいと思ふ。

戦後の学校山岳部の動きは大体に於て戦前の復習であると言つて差支ないかと思ふ。これも

大体曲りなりにも終つたような観がある。阪大も、新制大学の方のトレーニングは九月から始めたばかりではあるが、会の働きもこの冬山で一つのピリオドを打つたものと考えられる。学生山岳界と同調して阪大も一つの転機に立つてゐるわけである。昭和七年、入浜氏の後を受け、阪大編入直前の現工学部の前身、大阪工大の山岳部に自分の関係した當時もやはり一つの転機であつた。冬の滝谷、屏風岩も一応片付いてこれからは當時の言葉で言えば「長い尾根をピバツクしながらキャンプを進めて行く行き方」だけしか残つていないように思われていた。併しこれはあまりにも狭い考え方もう少し自由な考え方をしていたら、スケールの小さい部でも、もつと違つた行き方があつた筈である。今違つた条件下で同じような転機に再会して當時のことがまぎ／＼と憶い出されるのである。

春の雨飾東南稜

大 島 輝 夫

四十九年春は我々の山岳会も未だ正式に登足してはず、春山へ行くメンバーは徳永と私の二人だけだった。私は正月に入院して手術をし、三月には入学試験を受けたばかりだったので、長い計画には余力に自信がなく、結局西岡一雄氏よりかゝってお聞きしていた雨飾東南稜へ徳永を引張ることにした。此処で「雨飾」なる人の余り知らぬ山について解説しよう。大糸南線中土より三里小谷温泉の北方新潟縣境に在り高度千九百六十米、谷川岳より高い。白馬方面より見るとむしろ可愛い山であるが、東より仰ぐと威圧的である。東と南に岩壁をめぐらし、その間に東南稜が頂上近くに岩峯とナイフエツトを保持してはり出している。雨飾への一般ルートは頂上北側で傾斜はゆるいが日本海よりの烈

風が直接吹きつけて蒼氷になることとあると聞いた。

此の山について最初に書いた近代登山家は大島亮吉氏であらう。登高行二号（P. 141）によると「マツターホルンの如き怪偉な姿をして聳立する巨人の如き豪壯な山の姿を見た。その絶巔近くは雪も積りえない程の懐愴な急崖となつて黝い岩壁を露出している」と書いてある。その後水野祥太郎氏が東南稜を偵察され、（R・C・C・報告2）西岡氏等が峯北面より頂上に登られた（R・C・C・3及び泉をきく）。他に三田尾松太郎氏（幽山秘峽）や深田久彌氏の夏の絶行があるが、東南の寫真はどれにもない。又東南稜は夏も積雪期も登った記録は無いと思ふ。

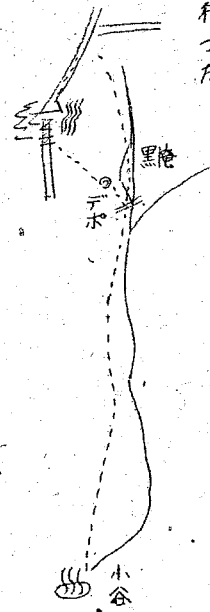
四月三日。晴後雨。テント等全裝備を持つて小谷入り。夕方上へスキーで出かけたが、視界悪くみぞれの降る中を帰つた。

四日。晴後小雪。五時起床。雨の音に寝て又目を覚すと青空が見えるのであわてて八時にス

キーで出発した。十時半黒倦の左側を登ると始
めて主峯の全容に接した。尚もスキーで登る中
に天候悪化し、頂上が見えなくなつた。右から
次が入つてゐる所で晝食(十二三)を食べる中
に我々もガスに包まれ、時々風が雪をたゞまつ
けるがとにかく岩場迫行く事にしてスキーをデ
ボし十三三。出発した。靴の楕で表層雪崩のデ
ブリをこえ左側の斜面を東南稜目がけて登り出
すと大体膝迄もぐり、次第に傾斜が急になりと
う／＼尾根の上へ出た。依然視界はきかぬが、
尾根が相当やせているので岩峯に近いらしい。
とにかくこの天候では登れぬから雪底の根元に
出来た穴に入つて休んでいると、好運にも時々
青空が見え出したのでアイゼンをつけて出かけ
る。(十四三。―十五。)すぐに岩場となり二十
五米のザイルでアンザイレン。徳永トツア。岩
に硬雪のついた悪場をロックハーケン三本を使
つて約二十米登り狭い所で〇を確保。此処に約
五十分かゝつた。次の短いピツチで岩稜の上の

三八粒立てる所に出た。反対側を見下すと絶壁
で下は見えない。第三ピツチはやゝ岩がかぶつ
てゐるので、ハーケン二本を使つて左側寄りに
登り、岩峯の上に立つた。こゝから頂上迄はナ
イフエツヅであるが、岩は出ていず、向つて右
側は絶壁で(東壁になる)左側は雪の急斜面が
遙か下迄続いている。確保してナイフエツヅの
左側斜面の方を慎重に進む。試みに靴で稜の上
の所をけりこむとぼかつと崩れて穴があき反側
側がすくと見える。最後に傾斜の少し急な所
を登り切ると、頂上だつた。(十七。十五)天候
は全く良くなり夕陽に焼山が白煙を出して輝い
ている。遅いので林む向もなくザイルをとき、
北側斜面を下り、肩を過ぎてから、適当にデボ
の見当をつけて、膝迄もぐりながら尾根を下つ
た。デボ(十八三。―十八四。)黒倦(十九二。)
川を離れて台地迄登る所でシールを又つけるの
が面倒なので、かついで靴でラッセルして上つ
たら全くへばつた。上の平でわかんの跡を見つ

ケスキーは重いばかりなので、立てて残し、翌日取りに
 泉へ十一時過ぎに帰った。スキーは翌日取りに
 行った。



雨飾は
 一日行程の山としてすぐれた山であると思ふ。

劔澤合宿

家田 千尋

夏山劔 三四峯フェイス (長次郎側)

六峯フェイス (ミノ窓側)

チンネ (京大ルート)

大島・加藤・家田

八月三日、B・Cを眞砂沢出合に設置し、源
 治郎尾根、八峯上半を終えて白馬に廻る佐江木

山佐、藤谷、神川を八月六日に送り、上記三名
 を以て、七日より十一日迄ヴァリエーションル
 ートとしてのフェイス登攀を行った。

八月七日、三四峯フェイス 長次郎側

B・C・ハ・Oの発劔沢を溯り長次郎雪溪に入る。
 長次郎岩小屋のすぐ下の雪溪を右に上り大きな
 クレヴァースを避けてそのまゝ左の岩場にとり
 ついた。こゝで四十米のザイルをつけて三ピツ
 チをこく。軽くすぎ灌木と草付の間に少しづつ出
 ている岩場を撰つてコンテナヤスに上った。こ
 の辺は下から見た程のすじさは全然なく直射日
 光と草いきれにむされ途中わづかの岩影で息を
 つなぐも2度ろ度いつのまにか最後の岩壁にま
 ている。花崗岩の傾斜のゆるいスラブでゴツ裏
 の感触が何とも云えず気持よくスリツプの危険
 などは毛頭ない。ピクク迄百米位の岩壁が続い
 ているがこゝをコンテナヤスをおりませて直接
 に三峯めがけて一氣にかけ上った。尾根筋から
 見る劔の姿は全くすばらしい。日光に照りはえ

て岩が互に陰影を作り合いくろがね作りの偉大な建造物の様な感じだ。尾根筋へは十一時頃に着き昼食後三、四峯ニハの草付と櫃松の中を長次郎側に四峯の最後のフエイスにとりつくべく二百米程をはい下つた。こゝも三峯フエイスと同じ様なスラブであるが花崗岩の間に別の岩の幅20程位の断層が入つていて、三峯フエイスよりも傾斜度は大であるにも拘らずこの岩の層がスラブに斜に上行している爲適當なホールと足場を手えて呉れて六ピツチ程。最後は四峯の岩頭に馬乗りになり、て再び尾根筋へ出るこの三四峯フエイスは極く[△]らしいが三人とも背中のリエツクを氣にしな[△]がら体を半分右側の空間にふり出して下から見ているとどうも安定が悪い、それに二人で立てる足場がないのでトツプに続いて二番。それから又トツプに続いて三番と三入パーテイの穴階を暴露しながらとにかく動く時間よりもジツヘルにばかり倍の時向をくつてい

る。それでも所要所にはちやんと先蹠者のピ
ライピンがあるのを我々のハーケンは腰でガナヤク云うばかり、ハムマーを振る所もない4ムニーを斜右上に上つて行き最後の二ピツチは全くフエイスの上に乗り出した様な形で大テラスのすぐ下のがし場についた。やはり想像以上に時間をくい、大テラスに着いたのが一時であつた。こゝは北面にあたるので日中全然日がさず寒くておちついて飯もくえないしするのでそのまゝ京大ルートをとるため左へトラヴァースをしそこを少し下つて最左の岩稜にとりつき陽光をあげて飯を。(〇印(つく丸丸))
簡單で特別につけるべきルートもなくスラブなるが故にどこからでも取付けれる。
四峯は三窓側をアプザイレンで下る少し面白い懸垂である。五峯の長次郎側を下つて、五六の大キレットからゲリセードで長次郎雪溪へB.Cへ帰るとまだ日は高く劔沢に映えて居た。
八月九日 チンネ
二股に移動したB.Cを〇六〇〇に出発し、冷風

吹きおろす三窓雪溪をマルのすぐ下から左へト
ラヴアースしてチンネの取付に着いたのホー
のりである。こゝからは普通のルートの中央チ
ムニーを上つたが大體四十米のザイルを三人で
使つて、上よりするゲツヘルセルフビレイ用
のハーケンに到達するのが精一杯であつた所よ
り見て、こゝでは三十米に三人がつながるのは
ちよつと考へものである。

最初の一ピツチははじめが少し悪いチムニー
とは云えなすぎて背中の全然使用出来ない普通
の岩場である。それから細くチムニー(△△の意)
喰ひ終ると暖くて更に睡氣をまよおした。そこ
から更に左へ出てニードルに對面するフェイス
を斜め上り主尾根に出んとしたのが意外に悪く、
天候も悪化して未たりして予想以上に時間を喰
つて居たので無理をせずそのまゝ左方グルンゼ
を下つた。こゝは簡單でわづかニピツチで、い
つものまにかかゝつたがスの渦巻く中を朝の取付
地点に出、そのまゝグリセードをしばして二畝

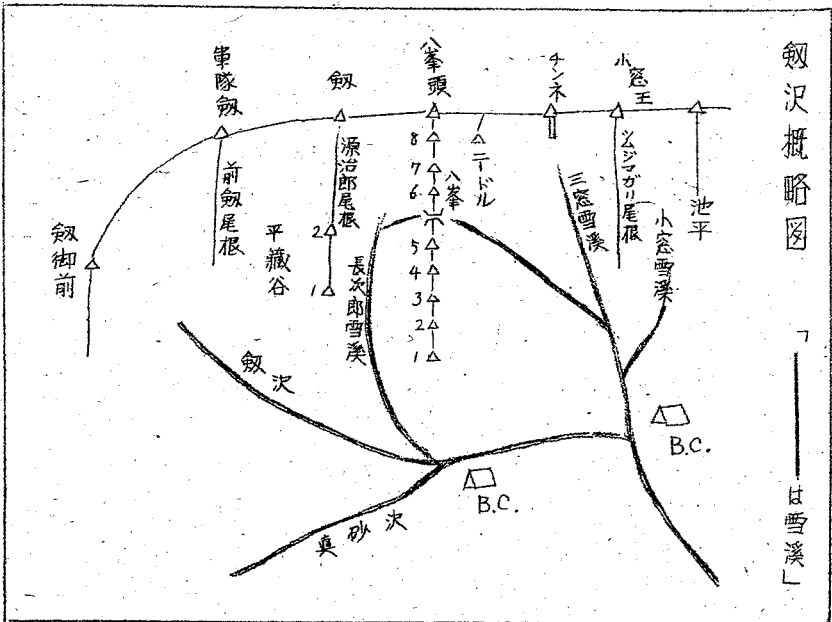
にかえつた。BC着は一八三。であつた。

八月十一日 六峯フェイス三窓側

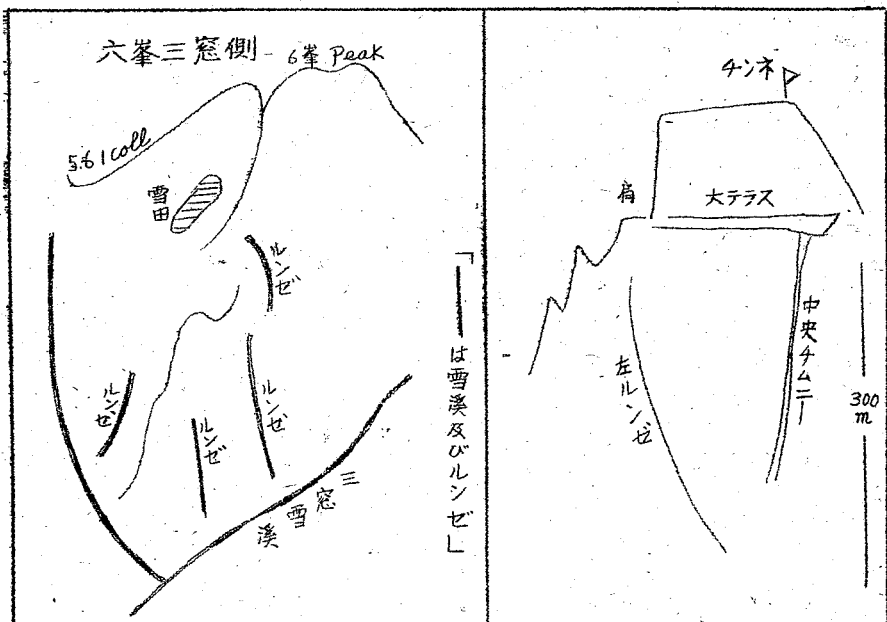
BC、OHニの出発三窓雪溪と五六キレットより
出ている雪溪の合流点のすぐ上の取付に一、二五
着、すぐにアンザイレンしたがこの所の約百米
上がガれてゐて、そこからの落石の跡が白く岩
の上に無数に残つてゐる。すこぶる氣持の悪い
所である。取付から少し左へ二ピツチ足場少く
摩擦を利用する。そこからコンテナアスで小さ
いルンゼに入るがこゝも落石多く浮き石になつ
てゐる。ルンゼがかぶつて少し悪いのでゲツヘ
ルするのがたよりない。このルンゼを二ピツチ
それからルンゼを離れて右上にはい上り百合
のはえた氣持のよい草付をどんく上つてから
再び左に巻き、チムニー状の左のフェイスを一
ピツチ、それから草付、スラブを経て、樞松を
腕力で強引に上り、六峯のピークの見える草付
に出た。こゝで昼食をし、一三、一五登この頃より
積乱雲におゝわれ夕立を思わせる、更に左のり

ツゲの樫松をこぐと、次第にリツツはやせてその左は大きなルンゼとなつて落ちている。このルンゼは大キレットからの雪溪に続いていゝのがこの最後の所はとて上れない程に悪い。頂廣このルンゼと、先の上つて来たフエイスの右にあるルンゼとが集つて来ている頭にあるやせ尾根を少し下り右側のルンゼの続きのガリーにまわり込んだ。傾斜は相当で雨でも降れば完全に滝になる所である。こゝをコンテナスで梯子を昇る如くすぎる。上は草付(一四三〇)左へまいて六峯下の雪溪に出、チヨロク流れる水に濁をうるおした。この雪溪の横の岩場はコンテナスで六峯のピークへ一五二〇に到達した。天候は更に悪化して今にも泣き出し相なので急いで五六のマルへ下つたが、マルへついた途端長次郎の方から大粒の夕立がやつて来た。白く煙る雨中をアイゼンをつけてクレヴァーの大きく口を開く雪溪を右に左に割れ目をさけながら二段に下つた。

劔沢概略図



原稿の順序が転倒印刷時に之を筆算の誤訂正不可能でお説が難くが此事をお詫びします



新雪の北岳

一バットレス第二尾根登攀

加藤 幹 太

今夏釧岳の岩場と取組んだ我々阪大高山部員は十一月上旬の秋休を利用して、次の三パーテに分れて新雪の白衣に包まれた山々に逞しい足跡を印した。その一は御嶽、第二は木曾駒、第三が我々の北岳である。始めて入る南アルプス、而も積雪季の北岳を狙いあわよくばバットレスを登つて見度いというのが我々の希望であり、幾分無謀に近かつたが、快晴に恵まれて第二尾根を登り得たのは幸甚であつた。

此の期間中我々の根據地とした野足川玄河原の小舎は今年八月下旬、地元菅原山岳会の手によつて新設されたばかりのもので、茲に其の好意を厚く感謝するものである。以下に其報告を記して見よう。

隊員 徳永 篤司

松久 博

小澤逞夫 加藤幹太

十月二十九日 大阪発中央線茅野に向う。

十月三十日 早朝茅野に着く。ハケ岳の白雪と

其の麓の紅葉とが見事なコンビをなして如何にも秋の高山らしい味を見せている。然し此の朝の寒さはひしくと身に迫るものがあつた。バスに乗つて杖突峠を越え高遠に出る。

この峠は素晴らしい眺望を見せて呉れる。高遠で伊那里行のバスに乗り換え戸台口で下車する。茲で米を買い、重くなつたりユツクを背負つて第一歩を踏み出したがしばらく行くと材木運搬用のガソリンカーの停車しているのが見え、早速これに便乗させて貰つて戸台迄突走る事が出来た。途中仙丈岳が雪を敷いて山あいに姿を見せ我々の鬪志をそよる様であつた。偶然同乗していた竹沢長衛氏に遇い今秋の積雪の多い事を聞き前途多難なるを思わせる。戸台着は午後一時、こゝより北沢小舎迄約5時間かゝるとの事であるが行く事にし

て戸台川に沿つて歩き出す。右岸に沿つて小一時間進んだ所に最後の人家があつた。こゝの主人は石灰を採取して暮している様であるが非常に親切な人で、今から北沢峠迄はまだ遠いし天氣も悪くなるから泊つて行つてはどうかとの事で我々も後に備えて刀をセーブするため好意に甘えて泊めて頂いた。此の荒涼たる谷に住み島を作り山羊を飼ひ三人の子弟を養育して居られる同氏の生活意慾には深く感心させられてしまつた。此の日は早く寝て翌日早朝に出発する事にする。

十月三十一日(晴) 戸台―北沢峠―野呂川(ヒバーク)

六時起床、七時出発、直ちに川を渡つて左岸をつめる。昨日午後から曇で今日の天氣が心配であつたが好転したのは有難かつた。左い河原をどんく登つて行くと左に鍬岳の岩峯が見えて来る。この辺から赤河原迄は曾つて木材の運搬に使われた爲に良い道でどんくはかどる。九

時頃戸台川の二俣分岐点に着く。此処から右に入つて八丁坂を登れば北沢峠へ達する所である。暫く休んで煙草を喫む。四人共コンデイションは良好の様で全く頼もしい。八丁坂を登り始めると今迄のゆるやかな登りと違つてずしりと肩にリユックが喰込んで中々苦しい。かさ／＼と落葉を踏んで無言のまま、喬木の林を行く四人の足音が静寂の世界に一種のリズムを形造る。秋の山はこうなくてはならない。やがて傾斜はゆるやかになり、樹木がごろ／＼している林の中へ入ると雪が現れた。愈々雪線へ来たのである。高さは二千二百米位。今迄地下足袋をはいていたものも靴にはきかえを相変らず電光形の道を出つて行くをやがて北沢峠に出る。この辺は既に一尺以上の積雪で本当なら道が分りにくいのであろうか二日程前通られた長衛氏の靴跡が判然としているのでこれを出つて行くと小舎に達した。時間には午前十一時三十分である。この峠から北岳を始めと見ることが出来た。真白な

ドーム型の山頂が突出しているのが極めて印象的であつた。薪營小舎で晝食をとり雪の上で穿真をとる。

12時30分小舎発、これより野呂川を下ることになるが是が我々の予想外の難行で道らしき跡は殆どなく右に左に懸崖が立ちはだかつて止むを得ぬ徒渉の連続で全く憂うつになつた。始めの中は雪があつて川幅も狭くどん／＼下れたが一四時半に野呂川本流の都合に着いてからは折からの増水で身を斬る様な冷水を膝から、時には腰迄つかつての徒渉が続き遂に玄河原に達せぬ中に日没に遭ひヒバークと決す。此の地点はや、広い所で左岸の岩の下に巧く寝る場所を見付けシートを敷きシユラフに潜り込んで一夜を明したが思つたより暖かであつた。此から玄河原迄は3㎞位と思われ。日程は一日遅れた。

十一月一日(晴)ヒバーク地点—玄河原小舎(○)
夕時起床、簡単に朝食をすませて出発、前日

の如く徒渉が続く。皆の悲痛な顔を早く歩り終つて見ていると中々面白い。12時25分待望の玄河原に着く。偶然二人の検師が居て橋をかけて置いて呉れたのを渡つて小舎に入る。眞新しい小舎!!登山名絵を見ると今年の八月に出まはばかり、外には河童の見事な彫刻がありエーモラスな気分になる。木の皮が山の様に積んであつて焚物は豊富で全く根據地には快適であつた。ゼンザイを食つて景氣を付け明日は北岳へと早目に就寝した。

十一月二日(晴時々曇)小太郎尾根登攀

ク時出発、小舎から直ちに林に入り大樺沢の右手をどん／＼直に沿つて登つて行く。落葉が積つて分りにくいケレンを目当に進む。雪線に出てから少々道に迷つたが一〇時十五分大樺小舎(白根御池小舎)に着く。前の御池の側へ出て見てハツと驚いた。雨池尾根の盡きる所壯嚴雄大なる北岳バツトレスが白雪を敷いて聳立している。またるといふ感慨し

きりである。一休みして深雪の中をラッセルが始まる。ルートは右上小太郎尾根へ出るのである。高度が高まるにつれて雪の狀態は悪くなつて来た。即ち我々の来る前に相当量の新雪が一度にどかつと降り、それが風等のために表面一寸程だけクラストを作り下は柔い深い雪という有様でうまくゆけはもべらず波めば膝迄入つて了う。下りには此のクラスト部分が脚にひつかつて痛くて仕様がなない。尾根へ出ると猛烈な風雨も天氣は悪化して何も見えない。アイゼンをつけてしばらく歩いたが玄河原迄帰る松久、小沢の兩名は時間も遅いので先に下る事にし、徳永、加藤は更に頂上目指して頑張つたが痕札もひどく天候益々悪いため遂に引返す。我々二人は大樺小舎に寝て翌日バツトレスを狙う事にしていた。此の小舎、名前ばかりで荒廃甚しい天井は存在するが廻りの板は殆ど無くクリスマスツリーの様な木が並べてあり、床もせい／＼二人が寝る所しかない。それでもミニユラフに入

ると疲れてぐつすり熟睡してしまつた。天気は再び好転しつゝあつた。月が出て山の背を照らす。谷から尾根へと吹上げる風の音をきくだけである。

十一月三日（晴）北岳バットレス第二尾根登攀

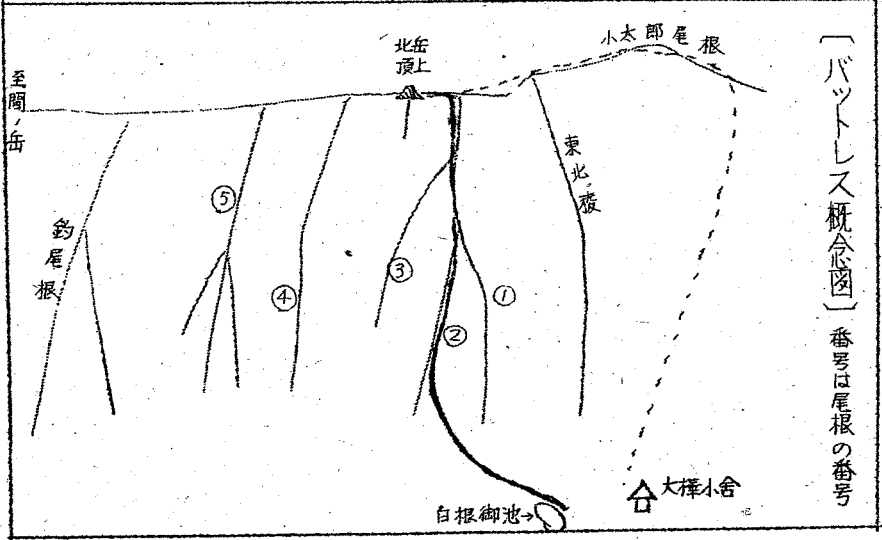
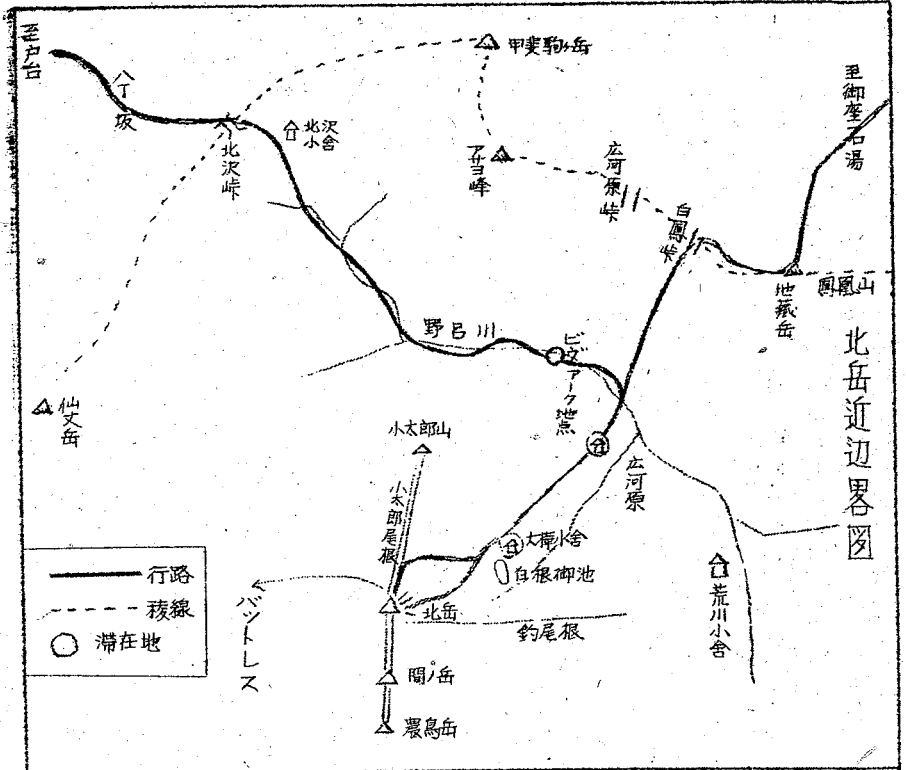
6時に目を覚まし快晴と知つて直ちに準備サブリュックに登攀用具を入れ6時半出發。

池の側から左手の森林地帯をぬけて深雪の大樺次に出る。こゝから腰迄入るラツセルを纏け目指す岩壁下に至る迄に一時間半を要した。以下の名稱は松濤氏（岳人12号・同氏は商大部報針葉樹9号に従われたもの）のものによる事にする。取付点はバットレス沢をつめた第二尾根直下で視界の利かない所であつたが意を決して二人でアンガイインする。アイゼンもはく。此処は岩の上に新雪が覆いかぶさりホールドも悪く傾斜も急で劈頭から難登である。然し岩に接している雪は幾分とけて氷つてゐる様で手で掴まつても中々崩れはしな

い。約3ピッチで一すしたテラスに出る。此処から私は最良と思われるルートを探つたつもりであるがスラブ状の岩で左手の岩との間に幅の広いチクニーの如き状態を呈していて体を喉に向けたり手を突張つたりしても靴に着けたアイゼンで足場に体重をかける事は非常に困難で一時は動けなくて途方に呉れた。實際はこゝでハイクンを当然打たねばならない所であつたが強引に登つてほつとする間もなく今度はちつとす様なトラヴァース、更に上へとより登るとやつと息をつく所に出る。この一ピッチが前後を通じて最大の難関で時間も三十分位かゝつた。こゝからは視界が開けて第四尾根も見える様になる。さして難しくない山稜を喘ぎ乍ら辿って行く。天気は絶好であるが下からの烈風は物凄いつ時がある。松久君のパーテイが小太郎尾根を登つてゐる苦だが全然見えぬ。雪は余りもぐらす渉る様であるが時計を見ると既に十一時である。やかて右下にルンゼが見えその上部を右

へ少し捲いて尾根の上に出る。こゝで乾パンとジャムで晝食(十一時半)を取り暫く休む上を眺めてはルートを考えるが直ぐ上に大きい独立岩峯が二つ並んでいる。あそこはどうして行けるだろうかと考えても行つて見なければ分らない。私は行けない場合を考えて、その時には岩の下の狭い雪のついたテラスを右へずつとトラヴァースして第一尾根へ取付くより他なしと思つていた。これも頗る困難であるが今来たルートを下る事は到底不可能であるから止むを得ないのである。食後此のオイフリツヂをつめると一段下に切込んでいる所がある。直接下れないので手前からピツケル頼りに腹を巻き乍ら下つてユルに出た。更に深雪の斜面を登つて岩峯の下に出た時驚喜した事には左右の岩の間がガリーになつていて三十米程続きその上は雪の斜面で第一尾根が見える。百米下から見下つて見えないこのガリーの存在が我々に登攀可能

の確信を抱かせた。徳永が先にコンティニアスなぐんぐん登つて遂に第一尾根と合流す、ランセルは辛いが勇氣百倍である。こゝからは雪も相当締つてくるがその雪の広い斜面の距離は相当長い。稜線が見える頃には疲弊のためか速度はずつと遅れた。然し遂にP.M.四時少し前に我々は稜線へ出た。敢闘9時間半のアルバイトの後のこの気分には酔う我々の目に映る周囲の自然の美しさは何という感激を我々に与えた事だろう。白銀の北アルプスを遠景に中央アルプスへ八岳富士をめぐらす圧倒的景観は此のハットレス登攀の終幕を飾るにふさわしいものであつた。頂上には松久、小沢両君の足跡があり彼等の成功も我々の胸に大いなる喜びを與えた。P.M.四時半成功の喜びを語り乍ら小太郎尾根を下る。大樺にいたのは五時半の日没寸前であつたが懐中電燈をつけて玄河原へ下る。先に帰つたパーティーと玄河原で顔合せしたのはP.M.九時である。



脚はかくくし手に傷を負つた我々を迎えて
呉れた松久君等の好意が身に泌みて嬉しかつ
た。明日は小舎に滞在する事にして就寝した
のは十二時を過ぎていた。夜中に雨が沛然と
降り出した。

十一月四日 玄河原小舎滞在（曇時々雨）

十一月五日 同右（曇時々雨）

増水のため野呂川の橋が流れ架橋したが失敗

元気も好くないため一日延期した。

十一月六日（晴）玄河原―白鬮峠―地藏佛―御

産石場

早朝出発、白鬮峠からえらいラッセルで苦し

み地藏から下つて左の御産石へ道を取り夕方

到着した。かくして今次の山行は終了したの

である。

十一月七日 御産石―田井―葎崎―甲府―大阪

（八日早朝）

附記

我々が今次の北岳バットレスを計画したのは

十月半ばであり研究不足の爲バットレスの名
稱、地形等に関して認識の足らなかつた事か
此の記録の最大欠点であるが、撮影した写真
に依つて此の欠点は幾分補われるものと思ふ。
殊に第二尾根は積雪季には未登攀の様である
が然りとすれば此の記録の不備なる点は遺憾
であつて深くお詫びする次第である。

嚴冬期の白馬主稜

徳永篤馬 司

〔時間的記録〕二〇〇北股出発―三〇〇―三三〇
猿倉小屋―五〇〇白馬尻―七〇〇―七二〇。ス
キーデポ―一〇〇〇。アイゼン、中京山岳会と
合流―一五〇〇。二峰下、アンザイレン―一七
三〇。一峰下トラバース―一九〇〇。雪庇下―
二〇〇〇。頂上小屋。

記 録

一、第一次アタツクの失敗と 白馬主稜登攀の予測

われ／＼阪大山岳会が一九五〇年冬季この白馬主稜を計画したとき、予め次の如き事が考慮された。

一、取付点 猿倉台地より杓子支稜の裾をまいて大雪溪に出る以上大雪溪から白馬沢より回り込んで地形上の主稜末端から取付くのは傾斜の緩い長所はあるが時間的に相当な口スである。その為には大雪溪から直接主稜の末峰めがけて横から取付くべき事。但しその附近で比較的取付けそうな処は夏季草つきとがし場であるためナダレを考慮して日出前に稜線へ出てしまわなければならぬ。

二、登攀時間及び隊編成、最高約十時間、テクニクよりアルバイトに向く二人より三人のパートナーを必要とする。

三、降路、大雪溪、原則として頂上小屋を使用せず、などこれに九四八年の三月と七月、浪高山岳部として登った三合尾根と主稜の経験に基いて割り出されたものであつた。第一回アタックに失敗した世日の状況は、冬の主稜が予想以上に頑強であることを教えてくれた。

一、サポートを先頭に立て引返し可能のギリギリまでラツセルに使いアタツクを温存する。

二、出発時刻を世日の四時より早くする他に全行程のピッチを意識的に上げねばならない。

三、スキーを稜線上まで上げる事。などを附加せねばならなかつた。

結果から逆に見て、以上の予測はまだ／＼不完全極まるものだつた。相当過大に評価していたに拘らず實際の主稜はもつと／＼頑強だつた。所要時間も予想の倍近く掛つたし、サポートに多くを期待するのは無理だつた。更に重要な点は、われ／＼が餘り問題にしていなかった最後の雪尻が全く主稜初登の田中信三氏の云われる通

りだつたという事である。田中氏は学連報告の中で嚴冬季に於ける主稜を登攀不能なりとし雪庇の切れない事をその理由に挙げて居られる。

二 出發より猿倉台地まで

元日の夜細見を徹底させ、食事の準備をする一方刻々の天候変化を観察して貰つた事は非常に好かつた。二日午前二時にたゞ早起されたわけは、食事をすまして三十分后に全員外へ飛び出す事が出来た。細見は殆んど完全に出発準備をやつてのけた。最初一時出發をためらわせた空模様ではあつたが、上るにつれて拘子尾根が鮮かに見え始めて来た。天候が快晴に向つたのではなく、実は猿倉台地の高度に雪の層が狭まつておりそれが原因で北股で曇り、猿倉小屋で晴になるといふカラクリが判つたのはもつと右だつた。所謂烈風後の晴天でない点では世日と変らなかつたが、しかし冷え切つたように牙えた白馬の全景に初めて接する事が出来るとい

う事が何より心を弾ませた。猿倉小屋では主稜をねらう中京山岳会は既に半時間前サポートをラッセルに送り出し、右登りのアタクと残留の二人が残つていた。すぐ上の猿倉台地で我々はこのサポートに追つさ先になつた。世日のときはラッセルとルートの選抜に時間を食ひ、夜が明けてから取付いていた。台地から大雪溪まで、拘子支稜の裾をまいて幾つもの沢と隆起が折重なつてゐる。遠近感の不分明な夜間、これを一々氣にしていたのでは時間を食うばかりである。少々の登りや下りは問題ではない。長走沢を渡つたわけは眞一文字に大雪溪へとトラバースを始めた。松久と久保、小沢を交代に先頭に立て、約一時間後の午前五時、われは大雪溪の真中に立つ事が出来た。黒々とした山影をその面に横たえて、白銀に光る巾広い帯が拘子の鞍部に上つていた。その彼方、ぼつかりと開いた稜線の窓に、氷のリンネに飾られた西の星空がキラリと覗いた。冷えくと音もなく吹

き下ろす風と共に、大雪溪の底を伝わつて凍りつく夜明前の寒気が体をゆすぶつた。見過せるかなり上部まで、雪面には一つのデブリもなく左手に杓子尾根が鋭くつき立つていた。予想した如く、直ぐ右手の一合雪後と呼はれる沢の横の傾斜は急ではあるがスキーで取付くに適していた。

自分の休みもなく、其の儘全員主稜側面の登行を開始した。折からトラバース・ルートにあつて、中京山岳会の携行する懐中電池が点滅して続いた。風こそないけれども、絶好の登攀日和が訪れ様としている事は疑いのない事実だつた。それをわれ／＼は全く申し分のない完全さで絶好のコンディションでしつかりとつかむ事が出来たのである。全力を本日に傾倒してどんな事があつても登り切ろう。嵐の様に心の底をかき立て、吹き荒れる情熱と感激が烈しい闘志に入り交つて全身を流れた。

東の空がいゝ様のない美しさに映えて、静か

に一月二日の太陽が東の涯から微笑みかけた。その清々しい夜明けの陽光は、過去に於て決して報いられた事のなかつたわれ／＼に對して、今日を迷がして他に絶對に機會のない事を教えてくれる様な明かるさを照し出した。

三 白馬主稜

輪カンのラツセルは膝より少し上までもぐつたが、冬としては良くも悪くもない雪質だつた。取付きで小沢に分かれ、稜線直下のスキーデボ地でサポートの松久、久保にスキーを托した。徳永、大島、冢田のアタック三名は、長い／＼主稜の稜線を交代でラツセルし乍ら頂上へと出發した。振り返る太い稜の横で、一かたまりになつて準備する中京山岳会の人達から離れた雪の中にわれ／＼を見守る松久と久保が立つていた。彼等はこれから五人分のスキーを担いで降り、飯を炊いて又迎いに上つてまなければならなかつた。

松久、久保、小沢はラッセルに酷使された体で、細見は徹夜で全員の出発準備に忙殺された身で、四人共見事に晴れた得がたい今日一日を心たくと麓でサポートに費さねばならなかつた。廿日のときの引返し点でアイゼンに代えたとき中京山岳会アタククの熊沢リーダーと鈴木氏が追いついて来られた。十時過ぎである。此処から頂上まで別に相談した訳でもなかつたが何時の間にか両隊一つになつて行動した。對抗して競走する他のスポーツに比し、登山に於ては協力すべき点があるだけで對抗すべき何者もない。一面識もなかつた両隊が白馬主稜に対し抱き合つて登る事が出来たのは登山家として無上のよろこびであつた。

夏季、一面に茂つた樺松スキの主稜、前半は充分に雪が乗つてふわりとした感じの急なりツギが只上り一本に延々と曲りくねつて続いていくだけである。左手にあたつて、雪をもつけぬ直上直下の岩稜が恐ろしい迫力でせまつていた。

越右側から吹きつける風に雪煙を巻き上げる頂上の稜線が碧空を区切り、そこから真一文字に大雪溪へ一九四八年の三月浪高のBとして登つた三合尾根が岩峰を並べて立つていた。右手には白馬以北の稜線と白馬主稜とに包まれて、白馬沢の雄大な景観が人間の介入を嚴として退きかけていた。足許の雪を巻き上げる烈風は絶えずわれ／＼を憚ましたが、しかし何処までもウインド、クラストの稜線は出て来ず、却つて不安定な足場は粉の様に崩れた。既に引き返すという事を忘れたわれ／＼は一度の休憩もなく交代でラッセルを推進した。正午頃、高度から云々は遙か下、大雪溪の上部にあたつて二兵、頂上をめざす中京のサポートを認めて双方から呼び合う事が出来た。見返れば視野の始めから深いラッセルの跡が一本、われ／＼の登行を刻みつけてるように延々と足許までつゞいていた。

夏季、主稜の右半部はガラ／＼の岩場と不安定なりツギの連続となり、ルートは三つの岩峰

によつてさえざられる。頂上に接近するに従つて加速度的に増加する傾斜は頂上直下の陰惨な岩場でオーバーハングを作り露出している。ルートは其処を避けて百米程の一枚岩のガレ場を登りつめ、山頂標より十米程北側に出るのである。

記念すべき最後の憩場は先ず第三岩峰（かりに頂上から順に第一、第二、第三岩峰と名付ける）より始まつた。そこで、われ／＼は六〇度の斜面に着いたパウダースノーを全部払い、岩場を出して進まねばならなくなつた。汗ばんだトップとは反対に、右は頭から雪をかぶつて寒氣と斗つた。日没が迫つた。第三峰上の稜線では折角苦心して作つたトップのラッセルを後の者は使えなかつた。足場の雪がずつて、登行に際して落ちるおびたぐしい雪のためにラッセルの上と同じ努力でラッセルをしなければならなかつた。ナイフ・リッゲを渡つた第二岩峰を夏季われ／＼は北側をまいて荷物をつり上げた。今、

吹き寄せられて積つた十数米の雪のためにオーバーハングは下にかくれて三分の一位をあらわしていた。こゝでアンザイレン。夏道通り右をまいたが上部に上行不能の一枚岩が二三十米つづいてるので止むなく中止し、左側に廻り込んだ鈴木氏が熊沢氏の肩から成功した。その間、三米程の高さである。日は没した。雪をかき出して登るのが一番良い方法には違ひなかつたが、既に第二峰で日没になつたわれ／＼にはそんな悠長な事は出来なかつた。事実一々雪を拂つておれば明日の朝まで掛つても頂上へはゆけそうになかつた。膝から下を足の裏の様に使つて、或は両腕を雪面に突込んで登行を続行した。苦肉の策である。アイゼンが全く効かぬ岩場は危険を極めた。樞松を一本々々掘り出して辿り着いた第二岩峰直下で、正面から左手へ続くオーバーハングと右手の一枚岩にわれ／＼は遂に行進を阻まれて了つた。

頂上二三十米に迫つた頂上まで、一度スリッ

ツプでもすれば絶対に助からないと思われる程ろしい粉雪の斜面——われ／＼に残されたルートはそれ以外になかった。

午後七時・くずれ始めた荒天と烈風に吹きまくられて頂上直下に立つたわれ／＼五名はこゝで致命的なしかも決定的な問題に直面させられてしまった。約三米の高さに大きくそり返つた堅い雪と氷の城壁が、ぴつたりと完全に上方を開して、今や灰色色に落け込んだ頂上の稜線の遙か下方まで切り崩せそうな、接近出来る一点とて見当らなかつた。

そして落ちないで止つておれるギリ／＼の処で、左腕を壁の中につゝ込んで雪を抱き、辛うじて振り上げたピツケルの上で、とても屈かぬ厚い雪扉が冷たく笑っていた。くずれ落ちる雪を空しく頭がらかふるだけだつた。こうなれば最早トンネルを掘るより他に方法はなかつた。約一時間の苦闘の後、全く失望したわれ／＼は足場に掘つた穴を拡げ雪扉下の壁に五人入れる

棚の様な穴をあけた。漸く訪れ始めた睡魔が、ラツセルに棉の如く疲れた体に抗すべくもない力で襲いかゝつて来た。沈黙の中でくずれ落ちたいと思つた五つの肉体が、何奠と立上る五つの魂と闘つていた。

「もう一度やうて見よう」棚の底を足場に家田が大きくそり返つて一ふりピツケルを振つた。そのとき——意外にも、あまりにもあつ氣なくぼつかりと雪扉が口を開いたのである。退却ではなく、前方に向つて運命はその扉を開いた。苦闘する主稜登攀隊と、同時に邁進する阪大山岳会の前進に向つて。

さつとたゞきつけて来る雪を交えた烈風——八時世分われ／＼は遂に頂上に立つた。

四 降路

初め、本計画でわれ／＼は主稜自体より登頂以後の行動を慎重に取扱つた。それは、一白馬山頂附近で二日間のリングをし、甚だし

いものでは頂上小屋と村宮小屋の間で道に迷つて遭難したという例がある様に、視界の望めぬ頂上附近は特に尾根が広くて非常に迷い易い。従つて降路には山頂標を探し出し、出来ればアンザイレンしたまゝ雪庇沿いに下る事が必要である。

ニ降路に使う大雪溪は降雪時常に雪崩れるものと見なければならぬ。これと主稜完登右の頂上着時商とを考慮するとき、雪崩に關しては登頂后直ちに下降し、どこか雪に閉ぢ止められる恐れのある頂上小屋は原則として使用すべきではない。

などであつたが實際は全て簡單に運んだ。頂上で待機していた中京のサポートの方に小屋へ抱き入れられ、暖い翌朝を山頂小屋で迎えたわれは、よく緊つた大雪溪を真一文字に下り、三時間右には元氣に根據地に下る事が出来たのである。

一〇〇〇 頂上小屋発—大雪溪—一〇〇〇 デホ地点

一三三。北股小屋

別表 NO.1

Ⅱ 第一次・第二次アタツクに於ける隊員の編成Ⅱ

マ第一次 (十二月三十日)

アタツク 加藤・大島

サポート 家田・松久・細見

残 留 徳永・久保・小沢

マ第二次 (一月二日・三日)

アタツク 徳永・家田・大島

サポート 松久・久保・小沢・細見

Ⅱ 白馬岳東面に於ける主要な記録Ⅱ

一九三一・三・三一 白馬主稜(積雪初) 神戸商大

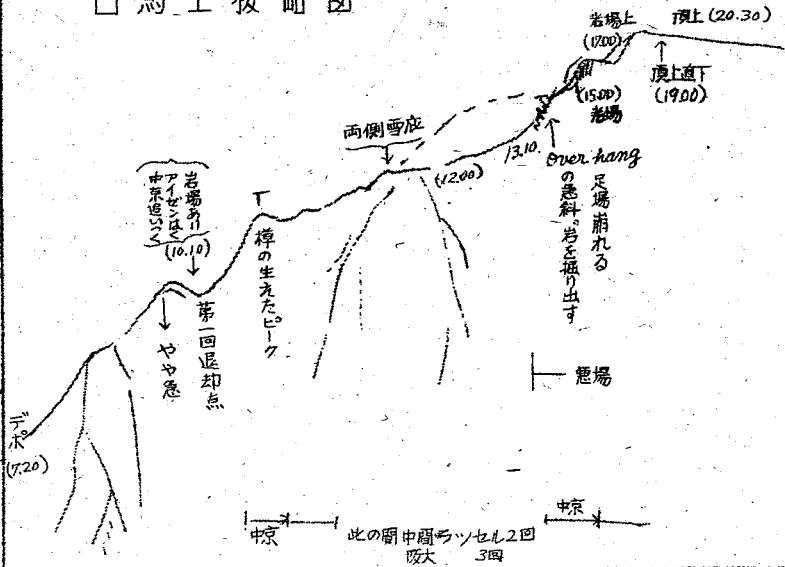
一九三四・七・一七 Ⅱ 田中・南学Ⅱ 秋山

一九三六・八・一 (夏初) 浪高 Ⅱ 中村・河原・盛岡

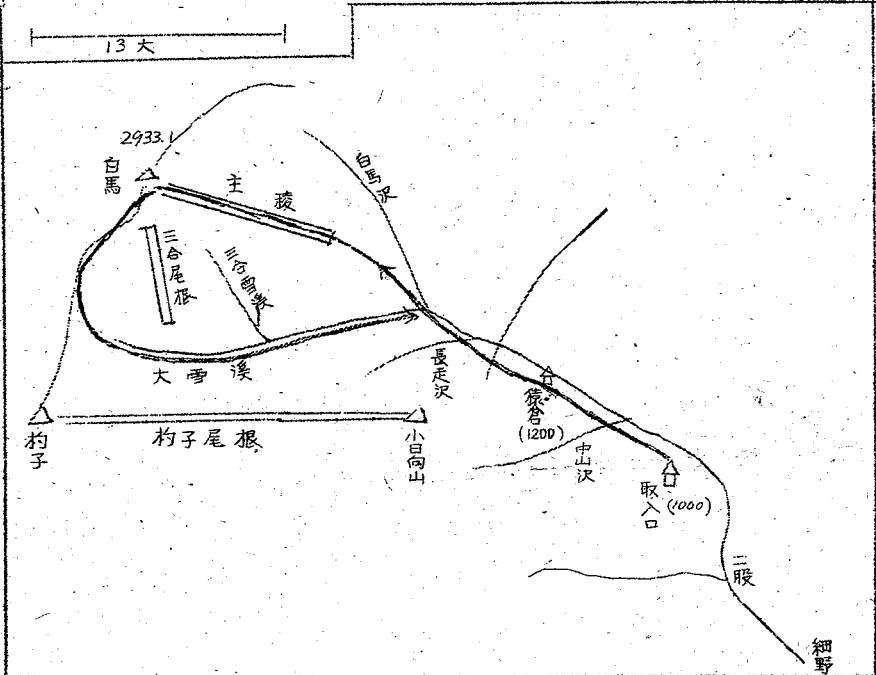
一九四八・三・一七 (積雪初) 浪高 Ⅱ 松井・松林

Ⅱ 佐谷・中西・徳永

白馬主稜略図



一九四八・七・二九 白馬主稜 (終夏初)
 || 徳永、加藤 浪高



大阪大學

山岳會記録

一九四九年度 主要記録

四月 雨節東南稜

夏山合宿 劍東面 チンネ等

八月 穂高。木曾駒縦走。朝日白馬。

秋山十一月(新雪季)

第一班 北岳バントレス第二尾根

第二班 木曾駒

第三班 劍岳

第四班 ハツ岳

冬山合宿 細野、猿倉合宿、白馬主稜登攀。

一九四八年

一月 遠見より鹿島鎗北壁 佐谷健吉、徳永

三月 白馬三合尾根 佐谷健吉、中西久雄、徳永

七月 白馬主稜 徳永、加藤

八月 明神最南峯中央壁 佐谷、徳永

明神最南峯南稜 家田、加藤

下又白與壁中央ルート 佐谷、徳永

以上は浪高のBとして行ったものである。

十一月下旬

富士(関西学聯合同登山に阪大より徳永

大島、藤谷参加)

一九四九年

四月 雨節南稜 徳永、大島

六月 阪大山岳会発表

一九四九年六月以降

○六月十九日 道場百丈岩、不動岩

篠田、渡辺、伊藤、大久保、徳永、大島

家田、加藤、松久、佐江水

○七月十日 比叡↓氷井山横高山

久保

○七月廿八日、廿九日 道場百丈岩

大島、神川、山佐、佐江水、藤谷

△夏山 劍合宿

大島、加藤、家田、神川、山佐、佐江水

藤谷。

七月廿一日 二〇二五 大阪発酒田行

八月一日 (曇) 泊下車。十六時山崎發愛本へ

家田、神川愛本 Camp 他は山崎泊り

八月二日 (晴) (〇五三〇) 山崎發愛本一宇

奈月一樽平一阿曾原 (一七〇〇) 一仙人池

(二〇〇〇) 一池の平 (二一〇〇)

八月三日 (晴) 池平 (二〇〇〇) 一ニ股一真砂

次出合 (一六〇〇) 一ベースキャンプ設置

八月四日 (晴) 真砂次 (〇九〇〇) 一小雲溪一

源次郎尾根一長次郎雪溪一BC

八月五日 (晴) BC (一〇〇〇) 一八峰上半一剣

(一七三〇) 一BC (二一〇〇)

八月六日 (晴) 神川佐江本藤谷山佐下山

剣沢 () 一三田平一追分小屋前天幕

八月七日 三四峯フェイス、BC (〇八〇〇) 一

三峯壁一四峯壁一五、六コル一BC (一六〇〇)

八月八日 BC (一四〇〇) 一ニ股 (一五、三〇) BC

移動

八月九日 BC (〇六〇〇) 一三窓コル一ナンネ

直下↓チムニ一取付 (一〇、三〇) ↓大テラス

(一三〇〇) ↓トラバース↓肩↓左方ルンゼ

下降 (一五〇〇) 一三窓コル (一六〇〇) 一ニ

股

八月十日 休養

八月十一日 BC (〇八二〇) 一六峯フェイス

三窓側一取付 (一〇、二五) 一六峯 (一四三〇)

一五、六コル (一六〇〇) 一BC (一八〇〇)

八月十二日 BC 撤收 (二〇〇〇) 一真砂出合

(一三〇〇) ↓三田平 (一六〇〇) 一地獄谷

(一八〇〇)

八月十三日 大島下山

家田、加藤 立山へ 地獄谷 (一〇、〇〇) 一

立山 (二、三〇) 一ニ、三〇) 一地獄谷 (二、三〇)

着 發 (一五〇〇) 一稱名 (一九三〇) 一

栗須野 (一三〇〇)

△ 朝日岳 白馬 佐江本 藤谷

△ 穂高 槍北鎌尾根 久保他一名

七月三十一日 発

八月一日 松本↓上高地↓横尾出合

二日 圓沢天幕設置 北穂高沢滝附近で

岩登り練習

三日 北尾根→前穂→奥穂

四日 ゴンメルシー

五日 圓沢→横尾→槍殺生岩小屋泊

六日 北鎌尾根→途中墜落負傷、引返す

七日 下山

↓木曾殿越 (十五、三〇) →空木頂上 (十八、二五) →幕営

八月三日 八、〇〇 出發→南駒 (九、三〇) →往復

→テント (十一、〇〇) →赤穂駅 (二一、〇〇)

○九月一日 和賀山系久留尊山 久保

百丈岩

○九月二、三日 徳永、大島、家田、加藤、神川

○九月十八日 家田、北條、小沢、細貝、上田
百丈岩

○九月廿四日 廿五日 百丈岩、不動岩

篠田、徳永、大島、家田、加藤、松久、佐
江水、細見、田島、二本、小沢、馬場、赤
尾氏

△ 木曾駒縦走 大久保、伊藤

七月三十日 大阪発

〃 三十一日 木曾福島 (〇、三三〇) →駒湯

(四三〇) →菅林小屋泊 (十六、〇〇)

八月一日 出發 (八、一〇) →本岳頂上 (十二、四〇)

→極楽平 (十四、〇〇) →泷沢ト檜尾、コル (

十六、〇〇)

〃 二日 出發 (八、四五) →熊沢岳 (十一、三〇)

○東多紀アルプス 徳永、松久、家田、細見

小沢

十月八日 大阪 (一四、三五) →丹波大山 (一

六、五七) →バス→粟栖 (一七、四〇)

粟栖登 (一八四五) — 鼓峠 (一九〇〇) — 稜線
炭焼小屋 (一九一五) 引き返し (二〇〇〇)

出合 (二〇二五) — Camp (二一〇五)

十月九日 降雨停 家田細見 (二二二〇) 偵察

小沢 (一二五〇) 下山帰る。

十月十日 徳永下山 (〇九二〇) 家田細見松久

出登 (〇九四〇) — 稜線 (〇九五〇) — 三岳

(一〇三〇) — ユーレイ峠 (二一三〇) — 出合

(二一五〇) — 登 (二二四五) — 篠山 (四四五)

十月廿三日 久保 ポンポン山 釋迦岳

秋山 北岳 木曾駒 御岳

○北岳 バットレス 第二尾根

十月廿九日 大阪登 (一五三五) 徳永、加藤

松久、小沢

廿日 茅野 (〇五、四〇) — 戸台口 (二〇一〇)

一旬登 (二二二〇) — 戸台 (二二、三〇) — 白岩

上島四郎宅 (一四〇〇)

廿一日 上島氏宅登 (〇六二五) — 赤河原

(〇八二五) — 八丁坂 (〇九二七) 北沢峠 (二二〇)

一山梨縣管小屋 (二二二〇) — 荒沢出合 (

一三、四〇) — 野呂川出合 (一四三七) — 日没

悪場のため岩の下でピツアーク (一七〇〇)

十一月一日

ピツアーク地 (〇八一〇) — 広河原小屋 (二三五)

二日

広河原小屋 (〇七〇五) — 白根御池小屋 (一〇一五)

一草スベリ 上行 — 尾根にて

I 徳永、加藤 Party と、松久、小沢 Party 合れる (二三四)

I 大樺小屋着 (一七〇〇)

II 広河原小屋着 (一六五〇)

十一月三日

I (徳永、加藤) バットレス登攀

大樺小屋 (〇六、三〇) — 第二尾根取付 (〇八

〇〇) — 北岳 (一六、〇〇)

大樺小屋 (一七、三〇) — 広河原小屋 (二二、〇

II (松久、小沢)

広河原 (〇七、三五) — 大樺小屋 (〇九二五)

北岳頂上(一三四五)―本河原(一六三〇)

十一月四日 雨 停滞

五日 " " "

六日 " " "

本河原(〇七〇〇)―白鳳峠(一〇〇〇)―

養河原(二三四〇)―鳳凰小屋(一四〇〇)

―御座石小屋(一六四〇)

十一月七日

小沢のみ中央線、他は甲府より身延線、東

海道線經由

十一月八日 早朝大阪着

○木曾駒

家田、細見、田島

十月廿九日 大阪発(二三、二五)

廿日 上松(〇九、三〇)―敬神滝(二三、二五)

―金懸小屋(二四、四〇)

十月廿一日 金懸(〇八、五〇)―遠見場(二三、三〇)

―本岳(一五、五五着)―一六、一五着)―中岳小舎

(一六、二五)―宮田小屋(一六、五〇)

十一月一日 宮田小舎(一〇、一〇)―宝劔(一〇、三〇)

偵察―宮田小舎(一、三三〇)

十一月二日 家田、細見

宮田小舎(〇七、三五)―極樂平(〇八、三〇)―

独沢岳(一〇、一五) エル(一〇、五〇)―引返し

(一一、二〇)―宝劔(一四、〇五)―宮田小屋

(一四、三〇)

十一月三日

宮田小舎(一〇、一五)―本岳(一〇、四五)―遠

見場(一一、四五)―金懸(二三、〇五)―敬神滝

(一五、三五)―上松(一七、三〇)

○御岳

大島、神川、北條、二本、馬場

木田敬氏(KO O.B)

十一月二日 大阪発(二三、二五)

三三

木曾福島(〇九、三五)―黒沢(一〇、四五)―松

尾滝(二四、〇〇)―四本松小屋(一六、〇〇)―

湯川小舎(。九。〇。〇)―頂上直下(一二。〇。〇)

―湯川小舎(一四。三。〇)

十一月五日

湯川小舎(一。三。〇)―黒沢(一五。三。〇)―福島

(一六。四五)

八岳 大久保 伊藤

十一月十日より同十四日

△冬山 細野 猿倉合宿白馬主稜登攀

十二月廿二日 家田、細見、四宮、由比、浜

田島、北條、亘、塚谷、大阪登

” 廿三日(晴)細野着 スキ―練習

” 廿四日(みぞれ)黒菱往復、中登隊大

阪登

十二月廿五日

篠田教授、徳永、加藤、大島、小沢、三木

細野着、先登八名千前四谷往復午後スキ―

十二月廿六日(曇) 荷上げ

徳永、家田、四宮、由比、浜、細見、猿倉

往復ボツカ。加藤、大島、猿倉泊り、夜中

京五名来る。松久、久保、細野着、全員揃

う。

十二月廿七日(雪) 第二回荷上げ。馬尻偵察

加藤、大島(六。三。〇)出登―ラッセルしつゝ馬

尻迄往復―猿倉(十三。〇。〇)―細野

―篠田、徳永、家田、松久、久保、細見、由比、浜

田島―細野(九。三。〇)―猿倉(十四。三。〇)

―篠田教授、加藤、大島、猿倉(十五。三。〇)―

細野(一八。三。〇)

三木、北條、小沢、細野往復カンパソ到着。

十二月廿八日(雪) 第三回荷上げ

加藤、大島(十三。〇。〇)―取入口(十五。三。〇)

―猿倉(十六。〇。〇)

徳永、家田(十八。〇。〇)猿倉―二股(二〇。三。〇)

日登取入口借用の交渉なす。

十二月廿九日

由比、浜、田島(九。三。〇)猿倉登―細野(十三。〇。〇)

家田、小沢(十三。三。〇)―猿倉(十六。三。〇)

徳永・榛田先生見送り四谷往復

取入口小屋の許可を受く。二十三時細野登

猿倉へ

中京熊沢氏等猿倉着

十二月廿日 第一回攻夷 取入口移転

加藤大島(三三〇)起床

猿倉(四〇〇)→馬尻(六三〇)→七峯下デ

ボ(八〇〇)→六峯(十二〇〇)引返し

→馬尻(十四〇〇)→猿倉(十五〇〇)

デボよりは中京熊沢氏等四名とラツセル交

替して登つたが、新雪多量の為はかどらず

天候悪化したので退却。

松久・家田・細見、サポート、七峯(九一五)

より引返し 猿倉(十四〇〇)

久保・小沢 荷下げ 猿倉→取入口往復

夕方全員 猿倉→取入口

十二月廿一日

松久・細見・小沢、細野往復

加藤→帰宅

一月一日(雪)

家田・大島・久保・細見 取入口(十二〇〇)

↓猿倉(十三〇〇) 中京山岳会とイグル

→建設した後荷下げ十六〇〇。登→取入口

明日の天気を予想し細見徹夜準備。

一月二日 晴 第二回攻夷成功(本文参照)

徳永・家田・大島以上アタック。松久・久保

小沢

出発(三〇〇)→猿倉→馬尻→デボ

サポートと別れた。

→(十五〇〇)→七峯下場→頂上(二〇三〇)

久保・小沢 馬尻→猿倉→取入口

松久・家田→馬尻→猿倉、夕方馬尻迄行

き待つも帰らず夜取入口に下る。

一月三日(曇)

徳永・家田・大島、熊沢氏等と共に下山

頂上小屋(十二〇〇)→馬尻(十四〇〇)→

猿倉→取入口 細見に馬尻で会う。

細見 サポートの為 馬尻往復

冬山行動表

↷ は往復 ↑ 登り ㊤ アタック
 ㊤ はサポート ↓ 下り ㊤ スキー練習

日	細野着	24	25	26	27	28	29	30		31	1	2	3	4	5
天候															
主要行事		黒菱往復	中発隊細野着	荷上後登到着	荷上馬尻偵察	荷上		攻妻荷下		補給	荷下	攻妻		荷下	下山
篠田 25			細野	㊤	猿倉↷	馬返↷	帰宅								
徳永 25			細野	猿倉台地↷	猿倉↑	↓細野	↑猿倉	↓取入口	徳永	㊤	㊤	㊤↑白馬	↓取入口	ス	↓細野
松久 26				細野	猿倉↑	㊤	㊤	㊤↷↓取入口	松久	細野↷	㊤	㊤↷馬尻↷	猿倉台地↷	猿倉↷	↓細野
家田 23	黒菱↷	四谷↷↷	猿倉台地↷	猿倉↑	↓細野	↑猿倉	㊤↷↓取入口	家田	㊤	猿倉↷	㊤↑白馬	↓取入口	猿倉↷	↓細野	
加藤 25		細野四谷↷	猿倉↑	馬尻↷細野↓	↑猿倉	㊤	㊤↷↓取入口	加藤	帰宅						
大島 25		細野四谷↷	猿倉↑	馬尻↷細野↓	↑猿倉	㊤	㊤↷↓取入口	大島	㊤	猿倉↷	㊤↑白馬	↓取入口	猿倉↷	↓細野	
久保 26			細野	猿倉↑	㊤	㊤	取入口↷↓	久保	㊤	猿倉↷	㊤↷	猿倉↷	帰宅		
細見 23	黒菱↷	四谷↷	猿倉↷	猿倉↑	㊤	㊤	㊤↷↓取入口	細見	細野↷	猿倉↷	㊤細野↷	馬尻↷	帰宅		
小沢 25		細野	㊤	四谷↷	㊤	↑猿倉	取入口↷↓	小沢	細野↷	ス	㊤↷	ス	ス	↓細野	
由比浜 23	黒菱↷	四谷↷	猿倉↷	猿倉↑	↷中山沢	↓細野	㊤	<div style="font-size: 4em; opacity: 0.5;">X</div>							
四宮 23	黒菱↷	四谷↷	猿倉↷	㊤	㊤	ス	㊤								
田島 23	黒菱↷	四谷↷	四谷↷	猿倉↑	↷中山沢	↓細野	㊤								
二木 25		細野	四谷↷	四谷↷	馬返↷	㊤	帰宅								
北條 23	黒菱↷	休養	四谷↷	四谷↷	㊤	㊤	帰宅								
主・要宿泊地	細野	細野	細野	猿倉	猿倉	猿倉	取入口								
一・部宿泊地			猿倉	細野	細野	細野		一・部宿泊地			頂上小屋				

松久久保 猿倉台地往復、徳永等と会う。
 一月四日
 久保、細見 帰宅。
 家田、大島、松久、取入口、猿倉往復。

荷物全部下す
 一月五日 五名 取入口↓細野
 六月 帰宅

冬、山△口宿 食料報告

先づ準備に當つて予定献立表を立てて必要量を計算したが、登山中は予定献立に拘束されなかつたけれども大体不足なく合宿を終つた。

主食の予定献立は総日数を全七日分として朝は餅。晝は四日カンパン三日米。夜は米とし、他にカンパン三食をアタツク用とした。餅は一食二合。米は一、五合。カンパンは小麦粉三百五分とした。以上のみで一日約二千八百カロリーである。次に食糧の一覽を書く。

米一斗。餅一斗二升。カンパンは小麦粉四貫五百匁。メリケン粉百匁。

副食。豚肉五百匁。卵十個。鯨ハム四百六十匁。ハネベークオン三百匁。乾魚。ツクダニ。ソーセイジ三百匁。魚の罐詰四。玉ネギ各自十個。馬鈴薯一匁。ネギ若干。乾青豆一升。味噌八シゴ一杯。油各自二合。カレー粉二箱。ソーレス一本。ケチヤツプ一本。わかめ三束(二束余

る)。粉ミルク2罐。紅茶 $\frac{1}{4}$ ポンド。日本茶一袋。コーヒー若干。サツカリソ3箱。砂糖。塩。醬油各自少量。つけもの。みかん若干。アメ百円。バター半ポンド。ヨーカン四本。以上の中には予定表以外に個人的に持参したものの例えは罐詰等がある。ハネベークオン。ツクダニ。味噌。玉ネギは余つた。アタツク隊はカンパン各自三食及び三人でテルモス二本(ミルク入り)ソーセイジ約百匁、バター半ポンド、ヨーカン一本、アメ若干を持参し、特にバターとヨーカンは有カであつた。カンパンは約十枚(一食分)しか食わなかつた。

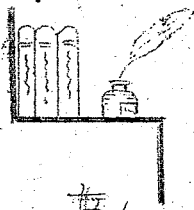
以上を総計百八十六食で消費し一食四十二円四十一銭四厘。中主食二十三円三十六銭となつてゐる。豚肉、卵を正月用に購入し残々の今迄の登山の中では最も贅次であつたが、非常に皆を元氣づけた事は確かである。(大島記)

細野猿倉の滞在日数は何人差が大きいので各自別々に支払った。その結果細野（一泊二百三十円）二百円しに長く居た者は高くついている。共同購入費は一人九百円宛となつた。

一例を示すと

入	230円	1日	300円	3日	5泊	900円	1430円	143円
工	800円	4日	300円	3日	5泊	900円	2000円	154円
	細野猿倉	細野猿倉	細野猿倉	細野猿倉	細野猿倉	細野猿倉	細野猿倉	細野猿倉
	入	工	入	入	入	入	入	入

以上の外旅費約七百円がある。



あとかがき

夏の半年、阪大山岳会がやっと会としての体裁を整え始めてから右をかえりみると、われは、こゝに至るまで会を育てるためにわれがとつて来た方法は全て全く正しかつたという事である。これ

は勿論何もかも正しいといつてゐるのではない。登山に対する全学への啓蒙、先輩との連絡、関西学連への積極的な働きかけ、どうしてむせねばならぬ資金網の確保などの手のとびかないまゝに放置された重要な問題が幾つも残つたし、新入会員の募集方法、指導方法、会の運営方法など決してあれで良かったとは云い得ないのである。又、われが気が付かなかつた大きな間違ひもこの時報を通じて現われて来ると思う。それにも拘らずわれが正しかつたというのは、この半年を通じて会が決して下を向いた事になかつた。常に前進しつゝけたという事実である。われはこゝの事を確信して一九五〇年に立向い度いと思う。

▽如藤の家泊りに泊り込んで時報をまとめながら感じ合つた事だが、どんな山行きでも必ず報告をみんなて書くようにこれから決めたいと思う。これはじつくり自分達の行動を批判して見る事の出来る唯一の方法である。初めて登攀記録な

るものを書いてみてその容易ならぬと共に文章のまづいのに驚き、如何に自分達がガムシヤラな登山を登り捨てにしていたかという事と、如何に狭い角度からしか山を見ていないかという事を知つて恥かしく思つた次第である。

▽春山の計画は全眞遠見―鹿島捨と決つた。出来る限り先輩の参加をお願いしたい。この計画のためにはどうしてもラゲウス二台を購入せねばならない。現在のわれ／＼にはテントもカホツクも何もかも足りないものばかりである。他のものは何とか足りないままですませよう。しかしラゲウスだけはこれがなければどうにもならないぎり／＼のものである。現在現役会員は一人残らず会費を完納している。運動部の部費など殆んどアテにならない現在、此の機会に会費の完納とラゲウス基金とに先輩諸氏の協力を御願ひして止まない。

▽毎週金曜午後四時から協銀ビル三階「日本山岳会」のルームで開催している「金曜例会」は、

一応軌道に就つて殆んど現役は百分の出席率を保つ事が出来た。篠田会長を囲むこの例会だけはどんな事があつても会員全体で育て上げなければならぬ。この一月から、五時半までその週の打合せなどを終え、五時半から研究会をもつ事になつた。この例会にもつとドシ／＼先輩の参加を願えれば有難いと思ひます。

▽最後に、この時報第一号を出すにあつてわれ／＼は感謝の氣持で一杯である。教授という多忙な職に居られながら篠田会長はこの金曜泉会の殆ど全部に出帯して一々会務を指導された。北岳や白馬主稜で行動が思うまゝにならなかつたとき、このことはどれだけ大きな力となり無言の激励となつたか知れなかつた。正直な話、われ／＼は子供の様な氣持で会長に接する事が出来る美しい雰圍氣に恵まれたのである。

次に常に温い眼でわれ／＼の行動を見守つて、下さる浪高山岳部の諸先輩、特に佐谷先輩や木村先生、事ある毎に助言を頂く日本山岳会の

西岡老、大田氏、睦田氏には感謝の言葉もない位である。

(一九五〇・一・一八 ルームにて徳永証)

追記

本時報は時報にしては少し量の多いものになつた。報告にせよという編集委員の声もあつたが、報告はもつと右に改めて作りなおす事にし、当初の意見通り時報第一号として出す事にした。今后、時報はもつと期間を短くして出すつもりである——大島。

昭和廿五年一月廿五

大阪大学山岳会「寺」

発行所

大阪

印刷所

池田市石橋町一五

誠

文